也、只可戰所ヲ不戰シテ、身ヲ愼ムヲ以テ恥トス、サテモ天下ヲ敵ニ受タル南方ノ者共ガ、遂ニ野伏軍計シツル事ノヲカシサヨト、日本國ノ武士共ニ笑レン事コソ口惜ケレ、何樣一夜討シテ、大刀ノ柄ノ微塵ニ碎ル程切合ンズルニ、敵アラケテ引退サハ、軈テ勝ニ乘テ計ベシ、引ズンバ又力ナク、其時コソ金剛山ノ奥マデモ引籠テ戰ンズレトテ、夜討ニ馴タル兵三百人勝テ、問ハヾ武シト答ヘヨト、約束ノ名乘ヲ定メツヽ、夜深ル程ヲゾ待タリケル、

〔神田本太平記三十二〕京軍事

やがてさがミの守ノ郎從十四五キはせ來りたるニ、此くびとほろトヲもたせて、將軍へ參り、清氏こそもゝの井はりまの守ヲうつて候らへとて、軍のやうヲ被申ければ、らつそくヲ明らかニ燃してこれヲ見給ふニ、年のほどハさもやと覺えながら、さすがそれとハ見えズ、田舍ニ往て多年ニ成ぬれバ、おもかはりしけるニやとふしんにて、昨日降人ニ出たりける八田左衞門太郎ヲめされ、是ヲバたがくびとや見しりたるとハれければ、八田此くびヲ一ト目見て泪をはらはらとながし、是ハ越中國ノ住人ニ二宮兵庫助□□と申すものゝくびニて候、去月ニ越前ノ敦賀ニついて候らひし時、此二宮、氣比大明神ノ御前ニて、今度京都ノかせんニ、仁木細河ノ人々ト見るほどならバ、われもゝの井殿となのつてくんで勝負ヲ仕るべし、是もし僞り申さバ、今世ニてハ永ク弓矢の名ヲ失ヒ、後世ニてハ無間の業ヲうくべしと、一紙の起請文ヲ書て、寶殿ノ柱ニおし候らひしが、果して打死ニ仕りけるニこそと申ければ、其ほろをとりよせ見給ふニ、げにも越中國住人二宮兵庫助□□曝尸於戰場、留名於末代ヲとぞかいたりける、昔ノ實盛ハ鬚ヲ染て敵ニあひ、今ノ二宮ハ名字を替へテ命ヲすつ、時代へだゝるといへども、其勇ミあひおなじ、あハれ剛ノ者カなと、敵ながらいけておかばやと、おしまぬ人コソなかりけれ、

〔備前老人物語〕ある老人、年老て身の養もいらぬもの也といひしを、ある人諫て、一夜の宿も雨露